

令和3年度病害虫発生予察情報 発生予報第3号(6月)

令和3年6月28日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	平年並	6月下旬の置苗発病ほ場割合は平年並である(±)。 BLASTAMによる感染好適条件の出現数は平年並である(±)。 天候予報(6月24日発表1か月予報)によると、向こう1か月の天気は平年と同様曇りや雨の日が多いと予想されている(±)。	発生の早期発見、早期防除に努める。 多肥田では発生しやすいので早期発見に努める。 長雨のため防除適期を失すおそれのある場合は、雨間散布を行う。
	紋枯病	全 域	平年並	平年並	前年の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	窒素肥料の多用を避ける。 薬剤を散布する場合は、穂ばらみ期に実施する。 気温が高くと上位葉鞘への伸展が早いと、注意する。
	イネツトムシ(イチモンジセセリ)	全 域	—	平年並	前年の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	中齢以降の防除は効果が劣るので、発生が目立つ場合は早期に防除を行う。
	斑点米カメムシ類	全 域	—	平年並	6月下旬の水田畦畔すくい取り地点割合は平年並であった(±)。	畦畔や水田周辺のイネ科雑草の穂は斑点米カメムシ類の増殖源になるので、草刈りを励行し出穂10日前頃までに終了させる。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並だった(±)。	
	褐斑病	全域	—	平年並	新梢葉での発生は確認されず、発生ほ場割合は平年並だった(±)。	梅雨時期に散布間隔をあけず薬剤散布を実施する。
	黒星病	中通り 会津	— —	平年並 やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は、中通りでは平年並、 会津では平年よりやや高く、果実での発生も見られた(+) 。	罹病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は散布ムラがないように丁寧に実施する。
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	新梢葉被害の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	
	アブラムシ類	全域	—	平年並	新梢寄生の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
モモ	灰星病	中通り	—	平年並	果実での発生は平年同様に確認されなかった(±)。	
	せん孔細菌病	中通り	—	平年並	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年並だった(±)。	再度園地を見回り、罹病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を基本とし、散布間隔があきすぎないように実施する。早生～晩生種の混植園では特に収穫前日数に十分注意する。
	モモハモグリガ	中通り	—	平年並	新梢葉被害の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	園地を見回り、幼虫発生初期に薬剤散布を実施する。
	アブラムシ類	中通り	—	平年並	新梢寄生は確認されず、発生ほ場割合は平年並だった(±)。	
	ハダニ類	中通り	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。

ナシ	黒星病	中通り 浜通り	— —	やや多い 平年並	新梢葉での発生ほ場割合は、 中通りでは平年よりやや高く(+) 、浜通りでは平年並だった(±)。 果実での発生ほ場割合は平年並だった(±)。	園内をよく見回り、罹病部位の 早期発見・早期除去を徹底する 。 薬剤散布は降雨前の実施を基本とし、散布間隔があきすぎないように実施する 。
	アブラムシ類	全域	—	やや少ない	新梢寄生の発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、 薬剤散布を実施する 。
果樹共通	カメムシ類	全域	—	平年並	ナシでの果実被害の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	園地での飛来状況をよく観察し、飛来を確認したら 薬剤散布を実施する 。

◎夏季せん定等の新梢管理により、通風・採光を良好にし、薬液がよくかかるように心がけましょう。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

リンゴ	■ハダニ類					
モモ		天候予報(6月24日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されています。ハダニ類の増殖に好適な条件が続くと、今後、被害が増加するおそれがあるので、注意が必要です。				
ナシ		要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、速やかに薬剤防除を実施しましょう。使用する薬剤は、各地方の防除暦等を参照し、収穫前日数等の農薬使用基準を遵守し、適正に使用してください。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、系統の異なる薬剤のローテーション散布を行いましょう。				

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	葉かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ほ場の開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意する。

	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合はやや少なかった(－)。	ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
夏秋キュウリ(露地栽培)	べと病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は多かった(+)	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	低密度時から防除を徹底する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
キク(露地栽培)	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	低密度時から防除を実施する。薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	中位葉以上での発生に注意し、低密度時から防除を徹底する。

リンドウ (※過去 6年間の 平均値と 比較)	葉枯病	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった (±)。	多湿条件で発生が多くなるの で、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は例年並よりやや少 なかつた(—)。	ほ場をよく観察し、低密度時 から防除を実施する。
	リンドウホ ソハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった (±)。	ほ場をよく観察し、防除を徹 底する。
野菜・花 き共通	タバコガ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった (±)。	生長点付近をよく観察し、寄 生や被害が見られた場合は、速 やかに防除を行う。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(—) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマ ト(被覆 栽培)	<p>■トマトかいよう病</p> <p>本病は種子や土壌中の残渣に生存している病原細菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では注意してください。</p> <p>■タバココナジラミと黄化葉巻病</p> <p>2006年にタバココナジラミ・パイオタイプQの発生が本県のトマトで確認されています。現在までに、中通り、会津南部、浜通りで本種の発生が確認され、また、本種が媒介するトマト黄化葉巻病ウイルス(TYLCV)も中通り北部、会津南部、浜通り南部で確認されています。</p> <p>本年も黄化葉巻病の発生が中通り南部で確認されています。本病はウイルス病であり、タバココナジラミの媒介により感染します。汁液伝染、種子伝染、土壌伝染、また、オンシツコナジラミ等による虫媒感染はしないため、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底することが重要です。</p> <p>本病の発生を認めた場合、侵入・脱出防止を心がけ、ほ場内でタバココナジラミの発生密度が高くなるないように発生初期から適切な防除を行ってください。</p> <p>また、未発生地域においても、購入苗等により持ち込むおそれがありますので注意が必要です。</p> <p>病害虫防除所HPに掲載している病害虫防除情報「注意喚起 黄化葉巻病(TYLCV)のまん延防止対策」、病害虫ライブラリー野菜花き類「コナジラミ類」もご覧ください。</p>
野菜・花 き共通	<p>■ウイルス病(アブラムシ類、アザミウマ類媒介による)</p> <p>アザミウマ類が媒介するトマト黄化えそウイルス(TSWV)、アブラムシ類が媒介するキュウリモザイクウイルス(CMV)の発生を確認しています。ウイルスの感染を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p> <p>キュウリでは、CMV、WMV及びZYMV等のウイルスの重複感染により急性萎凋症が発生する場合がありますので注意してください。</p>